

花粉症眼症状の 診断と最新治療

高知大学医学部眼科学講座 福島 敦樹

KEY WORDS

- 花粉症
- 結膜炎
- 鑑別診断
- 抗アレルギー点眼薬

Diagnosis and current therapeutic approach against ocular findings of pollinosis.

Atsuki Fukushima (教授)

はじめに

眼科では「I型アレルギーが関与する結膜の炎症性疾患で何らかの自他覚症状を伴うもの」を総称してアレルギー性結膜疾患と呼称する。花粉性結膜炎はアレルギー性結膜疾患の一病型である。アレルギー性結膜疾患に関しては、1993～1995年にかけて日本眼科医会アレルギー眼疾患調査研究班による疫学調査が行われた。全国28施設における3年間の定点調査であり、小児の12.2%、成人の14.8%にアレルギー性結膜疾患を有すると推定された¹⁾。アレルギー性結膜疾患のなかで、結膜に増殖性変化がみられずアトピー性皮膚炎を合併しないものがアレルギー性結膜炎である。アレルギー性結膜炎は感作される抗原や症状の発現時期により通年性と季節性に分類される。季節性アレルギー性結膜炎の代表が花粉性結膜炎である。2016年に行われた東京都による調査では東京都内の花粉症有病率

は48.8%と、1994年の同調査における19.4%に対し倍増しており、花粉症患者の増加に伴い花粉性結膜炎の患者数も増加していることが予想される²⁾。2017年に全国の眼科医とその家族を対象とした花粉症をはじめとしたアレルギー性結膜疾患の有病率についての調査が行われ、約4割の者が季節性アレルギー性結膜炎と返答した³⁾。このように、花粉性結膜炎の患者数は非常に多く、QOLに多大な影響を与えることから、適切な治療が必要である。

I. 花粉性結膜炎の診断

掻痒感を主とした自覚症状と結膜充血、結膜浮腫、乳頭増殖などの他覚所見による臨床症状(A)、全身的もしくは眼局所におけるI型アレルギー素因の証明(B)、結膜でのI型アレルギー反応の証明として結膜擦過物や結膜細胞診での好酸球の証明(C)を組み合わせることにより、アレルギー性結膜疾